

企画展早期終了のお詫びと収蔵展のご案内

昨年12月7日の開催以来好評をいただいていた「熊谷光夫のアートワーク展 ～版画と歴史小説と～」ですが、出品者ご本人の都合により、1月8日を以て早期終了とさせていただきます。観覧を楽しみにされていた方々には、御迷惑をおかけして誠に申し訳ありません。

1月23日からは、浜松文芸の先駆者たちを顕彰する目的で、松島十湖・山根七郎治・内田六郎を対象とした収蔵展を開催しております。

企画展ほどの派手さはありませんが、ぜひご観覧いただき、先人の感性に触れ、そこから今日の浜松文芸を語り、明日へと想いを馳せていただきたいと思います。



<主な展示資料>

- 松島十湖
 - 愛用品 俳句拓本 俳句掛け軸
 - 俳句短冊 折本 書籍(句集) 他
- 山根七郎治
 - 愛用品 水彩画(18点)
 - 水彩画巻き物 他
- 内田六郎と荻原井泉水
 - 愛用品 折本 絵葉書帖 自筆原稿
 - 自由律俳句掛け軸・色紙・短冊 著書
 - 荻原井泉水から贈られた掛け軸、色紙、銘々皿 他

文芸館の四季

昨年末、「浜松百撰」の下位さんから取材の依頼がありました。テーマは「わたしの風流」とのこと。

日頃から「風流」などとは全く逆な位置にいる私になぜ???

とはいえ何かとお世話になっている百撰のこと、無下に断るわけにもいかず、話の中身に全く自信のないままお引き受けすることにしました。

さて何について話そうか? お茶を嗜むわけでもなく、日々の暮らしを見回しても、わび・さびなどというものは欠片も無し。旅は好きだが、極めるなどというところまではとてもいかない。いっそ着物姿と洒落込んで、街中でも歩いてみようか……。

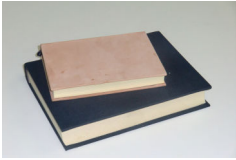
そんなことをあれこれ考えながら、文芸館の駐車場を行ったり来たりしているとき、「そうだ!」この文芸館には四季があったじゃないか。勤め始めてから講師の先生や皆さんに草木のことを教わりながら、季節の移り変わりを楽しんできたじゃないか。それを写真に撮ったり、思いつくまま拙文にまとめたりしてきたじゃないか……。

と、そんなわけで、自分が楽しんできた文芸館の四季ということでインタビューを受けることにしました。

それにしても下位さんには、私のヨタ話をよくも上手にまとめてくれたものだと感心し、感謝もしています。

(内容については「浜松百撰」1月号をお読みください)





浜松文学紀行 20

大岡昇平「大富部家のこと」

前は俳人富安風生と大富部家について書きましたが、「野火」「武蔵野夫人」などの小説家大岡昇平は、風生夫人敏子のすぐ上の姉まさ子と彼の叔父叢が結婚していた関係で、物心ついた頃から「まさ子叔母の親類筋に偉い俳人がいる」と聞いて育ったという。

大正12年11月北海道大学事務官だった大岡叢が外遊したので、妻のまさ子は親類のいる静岡市で4人の子どもと共に留守を守っていた。13年3月、中学4年の昇平は旧制静岡高等学校を受験した。その時彼は鷹匠町3丁目50番地の叔父の留守宅に1週間ほど厄介になっている。

「少年—ある自伝の試み—」によると、当時の昇平は恋愛と文学に取りつかれていたらうえ受験勉強をろくにしていなかったこともあって数学と、「新聞」という題の作文がからきしできなかった。昭和19年3月近衛第一聯隊入営時にも泊めてもらったが、昇平はそのまま「野火」の舞台となったフィリピンへ送られてしまった。静岡が舞台の小説「雲の肖像」には、二度の静岡での見聞が随所に生かされている。

昭和二十年十二月復員した時、この家は焼けていた。叢叔父は浜松市の野口町のやはりまさ子叔母方の親類へ疎開、二十一年死んでいた。私は鷹匠町の家で受けた印象から、大富部家はなんとなく静岡市にあるお家だと思っていた。ご一家は浜松にも広がっているのだな、と思った。ところがその後、知り合いになった、浜松市東田町在住の作家藤枝静男(眼科医勝見次郎)に聞くと、大富部家の本家はむしろ浜松市に近かった。市の北方二十キロ、天竜川支流阿多古川の上流一帯の山村を持ち、静岡から豊橋にかけて、東海地方にひろがった豪家であることを教えてくれた。(「大富部家のこと」)

大岡昇平が富安風生の風貌に初めて接したのは昭和48年、回想風作品「少年」が縁で小学校の同級生に再会、彼女が会員だった「四季」の十周年記念大会で小説について話をした。その時主賓として招かれていたのが富安風生で、同じ食卓に着いた。昇平は仕入れたばかりの大富部家の知識を披露、風生からは日常の時間の中に芸術の心を持ちこめという「包丁俳句」という言葉の意味と、「今からでもおそくはない、俳句をおやんなさい、長生きしますよ」と教えられた。この時風生89歳、昇平は65歳だった。

教えを守らず散文書きを続けていたら、次の年から白内障が進んで右目を手術したが、「三分の一失敗で、本が読めない。その少し前に、埴谷雄高も同じく右目白内障で手術して、五分の一ぐらい失敗し、藤枝さんの世話になっていた」(「目の相談」)。埴谷共々目の方は藤枝静男に頼れたが、新たに心不全が見つかり毎年入院する始末。それに引きかえ風生先生は90歳を超えても毎年数百句をものにしていく元気さである。親類の二人の文学者が生前出会ったのは、この時だけではなかったろうか。